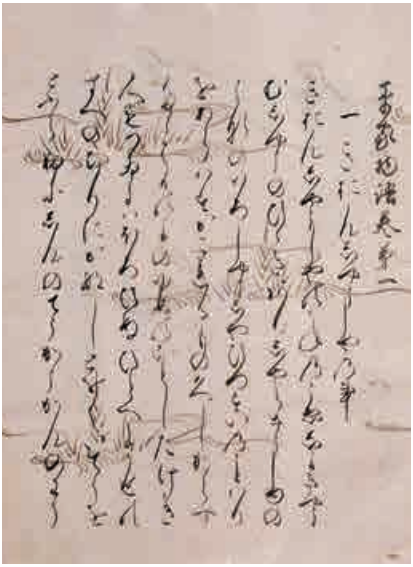
國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵奈良絵本『平家物語』考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 岳史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000633

《國學院大學図書館所蔵奈良絵本『平家物語』》

外観



巻一冒頭

巻一目録

巻三「有王が島下りの事」

巻一「妓王の事」

巻六「小督の事」

巻五「勧進帳の事」

巻七「忠度都落の事」

巻七「木曽の願書の事」

巻九「木曽の最期の事」

巻八「名虎の事」

巻十一「那須与一の事」

巻九「敦盛最期の事」

巻十二「土佐坊斬られの事」

巻十一「嗣信最期の事」

國學院大學図書館所蔵奈良絵本『平家物語』考

山本岳史

一、はじめに

本稿は、國學院大學図書館所蔵奈良絵本『平家物語』（以下、國學院本と略す）の特徴と諸本間での位置づけを明らかにするものである。はじめに國學院本の書誌を示す。

〈請求番号〉貴四二八八～四二九九

〈外　題〉「平家ものかたり　一（～十二終）」
（表紙中央原装題簽。金砂子散らし）

〈内　題〉「平家物語巻第一（二～六、八～十二）」
巻七ナシ

〈目録題〉「平家物語巻第一目録」（二～七、九～十二）、「平家物語巻第八」

〈尾　題〉「平家物語巻第三」（四、十～十二）

〈巻　冊〉十二巻十二帖

〈残欠状況〉完本

〈保存状況〉良好。虫損あり。

〈装　訂〉列帖装

〈表　紙〉金茶色牡丹唐草文様（裂・原装）
〈寸　法〉縦二三・四糎×横一七・三糎
〈見返し〉金地布目型押文様
〈料　紙〉斐紙（銀泥の下絵あり）
〈本文用字〉漢字平仮名交じり
〈一面行数〉十行
〈字　高〉約一八・五糎（巻七～九：約二〇・〇糎）
〈丁　数〉巻一99丁（遊紙前1丁）、巻二114丁（遊紙前1丁、後6丁）、巻三100丁（遊紙前1丁、後2丁）、巻四95丁（遊紙前1丁、後1丁）、巻五86丁（遊紙前1丁、後2丁）、巻六71丁（遊紙前1丁、後1丁）、巻七61丁（遊紙ナシ）、巻八55丁（遊紙前1丁、後1丁）、巻九78丁（遊紙前1丁、後3丁）、巻十88丁（遊紙前1丁、後1丁）、巻十一94丁（遊紙前1丁、後1丁）、巻十二82丁（遊紙前1丁、後3丁）
〈絵　〉巻一7図、巻二4図、巻三4図、巻四4図、巻五4図、巻六3図、巻七4図、巻八4図、巻九4図、巻十4図、巻十一3図、巻十二4図
合計：49図
＊見開き絵（両絵）ナシ。
＊挿絵丁の半葉は空白。
＊丁の表裏ともに空白箇所あり。
＊本文丁の半葉に空白箇所あり。
〈書入・貼紙〉ナシ。塗抹訂正箇所あり。
〈奥　書〉ナシ
〈書写年代〉江戸時代前期
〈印　記〉「津輕／蔵書」（朱長方印・目録丁、巻三のみ本文冒頭）
〈その他〉津軽家旧蔵。
本文は少なくとも二人以上の筆からなるか。（特に巻七～九は他巻と筆跡が異なる）

國學院本は十二巻十二帖で、牡丹唐草文様の裂（きれ）表紙を用いて列帖装に仕立てた、いわゆる豪華本である。[1] 各冊目録丁に「津輕蔵書」の印記があり（口絵参照）、弘前藩津軽家の旧蔵本であったことがわかる。弘前藩は、家老直属の用人であった楠美家が平曲を伝えて以来、藩をあげて平曲を伝承しており、『平家物語』との関係の深い土地である。[2] こうした背景をふまえれば、國學院本は津軽家の依頼によって制作された可能性も考えられる。しかし、具体的な制作の事情や伝来を示す文献資料は見つかっておらず、「津輕蔵書」の印記が使用された時期の特定もできていないため、今のところ本書の制作事情については未詳と言わざるを得ない。挿絵は全部で四十九図あり（《挿絵場面一覧》参照）、すべて半葉で見開きの絵はない。また、挿絵のある丁の半葉はすべて空白になっており、その他にも空白箇所が複数確認できる。管見の限り、空白箇所に糊の跡などは見当たらないため、そこにもともと挿絵があったのか、あるいは制作当初から空白だったのかについては、どちらの可能性も考えられる。

二、國學院本の特徴

國學院本の最大の特徴は、本文、挿絵ともに、『平家物語』の絵入り版本である、寛文十二年版・天和二年版系統を典拠にしているということである。

國學院本の特徴に言及する前に、まずは『平家物語』の絵入り版本の種類を確認しておきたい。『平家物語』の絵入り版本は、大きく六種に分類される。[3]

『平家物語』の絵入り版本

①明暦二年版【一六五六】

②**寛文十二年版【一六七二】**（天和二年版【一六八二】）

③延宝五年版【一六七七】（貞享三年版・元禄四年版・宝永七年版・享保十二年版）

④元禄十一年版【一六九八】（万屋清兵衛版）

⑤無刊記版（ひらがな十四行本）

⑥元禄十二年版【一六九九】（横本）

寛文十二年版（以下、寛文版と略す）は、二番目に出版された絵入り版本で、寛文十二年版を基にして出版されたのが天和二年版（以下、天和版と略す）である。最初に出版された明暦二年版（以下、明暦版と略す）と寛文版の違いについて、出口久徳氏は、[4]

明暦版は、以後の絵入り版本に利用された絵も多く、近世期に制作されたいくつかの絵入り写本とも結びつきが強いテキストである。そうした明暦版に続き、十六年後に挿絵を新たにして刊行されたのが寛文版である。以後の延宝五年版（一六七七）や元禄十一年版（一六九八）等が明暦版の挿絵を典拠とした部分が確認できるのに対し、寛文版と明暦版とは関わりがそれほどみられない。明暦版との差異化が意識されたのかもしれない。

と指摘されている。また出口氏は、寛文版の本文丁と挿絵丁の関係について、[5]

・挿絵と本文は別に刷られ、同一の丁にならない。見開き一両図なし。
・本文と挿絵は、それぞれ別々に、数字(丁数)が付される。挿絵が本文のどの位置に入るかは指示されていない。

といった特徴があることも指摘されている。こうした寛文版の性格をふまえて、國學院本の挿絵と本文の特徴を明らかにしていきたい。寛文版と天和版の挿絵はすべて一致しており、どちらにも独自の挿絵は見られない。よって挿絵の比較に寛文版を用いた。なお、本文については天和版の出版に際して寛文版の版木に修正を加えている可能性も考えられる。改めて寛文版と天和版の間で細かく版面の異同を確認する必要がある。

Ⅰ　挿絵の特徴

國學院本の挿絵は全部で四十九図あるが、それらはすべて寛文版に依っており、独自の挿絵は一図もない。見開きの絵がないという点も寛文版と共通している。加えて、先述の出口氏のご指摘にあるように、寛文版には章段と挿絵の位置が一致しないという特徴があるが、國學院本はこの点も共通している。

次に國學院本と寛文版の挿絵の構図に注目してみたい。本稿の後に付した《参考画像一覧》を参照されたい。

①・②・③は、巻二「西光が斬られの事」の成親が清盛邸に連行される場面である。一見して明らかなように、國學院本と寛文版は、人物の配置や背景など、全体の構図が極めて近い。一方、明暦版は成親の配置や人物の数、植物

の有無など、國學院本・寛文版とは相違点が多い。続いて、④・⑤・⑥巻十一「那須与一の事」の挿絵では、國學院本と寛文版との間に日の丸の描かれた扇や海に落ちた矢が有るか無いかといった違いは見られるものの、全体の構図はほとんど同じである。それに対して明暦版は、丁の表裏を使用した長大図となっており、当然のことながら國學院本や寛文版とはまったく違う構図になっている。以上の例から明らかなように、國學院本の挿絵は、人物の配置や画面の向きなど、全体の構図が寛文版と一致していることから、寛文版を典拠として制作されたと判断される。

しかし、國學院本の挿絵がすべて寛文版に依っているわけではなく、両者の間に異同が見られる場面もある。例えば、⑦・⑧巻一「殿上の闇討の事」の忠盛が鞘巻を差して参内する場面では、右上の襖絵の文様に違いが見られる。また、⑨・⑩巻八「太宰府落ちの事」の清経入水の場面では、國學院本は清経が烏帽子を被っているが、寛文版では烏帽子を被っておらず、大童の姿で描かれている。さらに⑪・⑫巻七「経正の都落の事」の経正が仁和寺御室に青山の琵琶を返す場面では、寛文版の左下に僧が二人描かれているが、國學院本には描かれていない。ここに挙げた例はごく一部であり、他の箇所にも似たような異同が確認できる。総じて國學院本は、寛文版に比べて簡略な場合が多い。

國學院本と寛文版の挿絵を比較して、本文の内容に関わる大きな違いが見られるのは、⑬・⑭巻十二「紺掻の沙汰の事」の場面である。この場面は、頼朝が文覚から父・義朝の首を受け取るところである。当該本文は次の通りである。[6]

同じき八月廿二日、高尾の文覚上人、故左馬頭義朝のうるはしき頭とて、尋ね出して首にかけ、鎌田兵衛が首をば、弟子が首にかけさせ、関東へぞ下られける。（中略）聖、今日すでに鎌倉へ入ると聞えしかば、源二位、片瀬河の端まで迎へにぞ出で給ふ。それより、色の姿にいでたちて、鎌倉へ帰り入らる。聖をば大床に立て、我が

身は庭に立つて、泣く〳〵父の頭を請け取り給ふぞ、あはれなる。

傍線部にあるように、本文では文覚が大床に立ち、頼朝が庭に立って義朝の首を受け取ったとある。寛文版は、傍線部の本文を基にした人物配置となっており、文覚が三方に乗せた義朝の首を頼朝に渡すところを絵画化している。一方、國學院本は全体の構図は寛文版に依りながらも、文覚は義朝の首を持っていない。この國學院本の絵では、話の中心となるべきものが欠けていることになり、もはや何の場面かわからない。國學院本が義朝の首を描かなかった背景には、残酷な場面を絵画化することを避けるといった意図があったと考えられる。

Ⅱ 本文の特徴

國學院本の本文は、挿絵と同じく、寛文版・天和版系統の本文を典拠にしていると推測される。その根拠となるのは、章段の立て方が共通しているということである。例として巻六の目録丁を挙げたが（《本文比較画像一覧》参照）、一見して分かるように、國學院本と寛文版は各章段に番号を記す点で共通している。比較として挙げた明暦版や最初の平仮名整版本である寛永三年版では、章段番号は記されていない[7]。また、例に挙げた巻六目録では、國學院本と寛文版は、漢字の宛て方や字母まで一致していることがわかる。こうした傾向はおおむね全巻に亘って確認することができる。一方で、版本で漢字表記だったところを平仮名に改める場合も少なからず確認できる（《本文比較画像一覧》参照）。一例として、比較的漢字表記の多い巻一「祇園精舎の事」を挙げたが、寛文版で「諸行」、「花」、「色」、「盛者必衰」、「者」、「春」、「夜」、「夢」と表記していた箇所を、國學院本では平仮名に改めている。奈良絵本は、作品のジャンルに関係なく、一般的に平仮名を多用する傾向が見られるが、國學院本も同じ傾向を示していると見てよいだ

ろう。

Ⅲ 寛文版・天和版の挿絵について

ここまで、國學院本が寛文版・天和版系統を典拠として制作されたということに言及してきたが、國學院本が参照したのは寛文版と天和版のどちらであったのか、少しく推測してみたい。そこで注目されるのは、寛文版と天和版の挿絵の扱いの違い、特に巻ごとの挿絵の数についてである。

現在までに、実見したもの、国文学研究資料館の紙焼写真やマイクロフィルムで確認したものを合わせて、寛文版は三種、天和版は九種調査する機会を得た。

はじめに寛文版の巻ごとの挿絵の数を示すと次のようになる。

巻一・十六図、巻二・十二図、巻三・十六図、巻四・十二図、巻五・十二図、巻六・十図
巻七・十四図、巻八・十図、巻九・十六図、巻十・十二図、巻十一・十六図、巻十二・十四図

寛文版は、一巻に十図以上の挿絵が入っていることがわかる。國學院本の挿絵は一巻に四図という場合が多く、もっとも多くて七図（巻一）しかないため、寛文版と比べるとかなり少ない。寛文版は今のところ三種しか調査できていないが、挿絵の入る順序や一巻の挿絵の数に異同は見られない。

一方の天和版は、九種調査した結果、刷りごとに挿絵の数が異なっていることがわかった。その調査結果は次の通りである。

	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本
巻一	16	16	16	10	8	4	4	4	4
巻二	12	12	12	10※	8	6	4	3	4
巻三	16	16	16	10	8	6	4	4	4
巻四	12	12	12	10	8	4	4	4	4
巻五	12	12	12	8	8	2	4	4	4
巻六	10	10	10	10	8	2	4	4	4
巻七	14	14	14	10※	8	6	4	3	2
巻八	10	10	10	8	8	欠	4	4	4※
巻九	16	16	16	10	8	4	4	4	4
巻十	12	12	12	8	8	4	4※	4	4
巻十一	16	16	16	8	6	2	4	4	4
巻十二	14	14	14	10	8	6	4※	4	4

（※）D本：巻二…10図のうち、2図は巻十一の挿絵。
　　巻七…10図のうち、2図は巻八の挿絵。
　　G本：巻十…4図すべて、巻九の挿絵。
　　I本：巻八…4図のうち、2図は巻七の挿絵。

前半の三種（A・B・C）のように、寛文版と同じ数の挿絵を有しているものもあるが、多くは全巻に亘って寛文版の挿絵を抄出しており、刷りごとに挿絵の数が異なっている。挿絵の数は十図を下回っているものがほとんどで、もっとも少ないもので一巻に二図しか入っていないものもある。寛文版の挿絵を抄出するに当たって選んだ場面に必

然性はないようで、「那須与一の事」や「灌頂巻」などの有名な場面を取らないものもある。また、寛文版は挿絵の入る順序に乱れは見られないが、天和版は挿絵の入る順序に乱れが散見される。さらに、D・G・I本の例のように、挿絵の入る場所を誤るといった錯簡もいくつか確認される。

國學院本に目を向けると、前述したように挿絵の数は一巻に四図という例が多く、一番多くて巻一の七図である。この数は天和版のD本以降と近い関係にあるといえる。また、巻一には巻二「烽火の事」、巻十一「大臣殿誅罰の事」の挿絵が誤って入っており（《挿絵場面一覧》参照）、これは天和版のD・G・I本と同じ現象が起きているといえる。

こうした共通点をふまえて想像をたくましくすれば、國學院本は寛文版よりも天和版を典拠として制作されたと考えるほうが妥当性が高いように思われる。ただし、挿絵の数の違いや錯簡は、國學院本の段階で生じた可能性もあるということを考慮しなければならない。そのうえ、國學院本に複数見られる空白箇所、これが制作当初からあったものなのか、あるいは何らかの事情で挿絵が脱落してしまったのかということをはっきりさせなければならないだろう。[8]

三、國學院本の位置づけ・まとめ

奈良絵本『平家物語』は、國學院本を含めて、今のところ十二点の現存が知られている。[9]

・國學院大學図書館蔵本（十二帖）
・真田宝物館蔵本（三十帖）
・神奈川県立歴史博物館蔵本（二十四帖）
・明星大学図書館蔵本（十帖・巻一、十二欠）
・プリンストン大学ゲスト文庫蔵本（三十帖）
・チェスタービーティライブラリー蔵本（二帖。巻一と巻十七のみ）
・旧島津家本（三十帖）
・洛東遺芳館蔵本（二十四帖）
・白百合女子大学図書館蔵本（二十八帖・巻十八、二十欠）
・永青文庫蔵本（三十六冊）
・平成二十三年十一月古典籍展観大入札会出品本（三十帖）
・姫路酒井家伝来本（二十四帖）

これらの奈良絵本『平家物語』の特徴について出口久徳氏は、[19]

（奈良絵本の）絵の表現は、最初に刊行された絵入り版本である明暦二年（一六五六）版とのなんらかの関わり

が考えられる本がいくつかある。すべての図についていえるわけではないものの、①真田本や②プリンストン大学本、③島津本、④ＣＢＬ本、⑤神奈川県立歴史博物館本などは、当該版本との直接的典拠関係は不明ながら、明暦版的な絵画を利用していると思われる表現がある。

と指摘されており、奈良絵本『平家物語』の多くが明暦版の挿絵の影響を受けていると推定されている。しかしながら、どの奈良絵本も明暦版の挿絵とぴったり一致するわけではなく、構図が近いと言える程度の関係でしかない。また松尾葦江氏は、奈良絵本『平家物語』同士の関係や今後の課題として[11]、

①～⑨のうち、⑦（稿者注：永青文庫本）はまったく画風が異なり、①（稿者注：明星大学本）も背景の描き方などからみて、別種としておいたほうがいいようだ。それに対し、②③④⑤⑥⑨（稿者注：洛東遺芳館本、旧島津家本、真田本、神奈川歴博本、白百合女子大本、古典籍展観大入札会本）、それに⑧（稿者注：國學院本）と⑩（稿者注：海の見える杜美術館蔵奈良絵本『源平盛衰記』）も極めて近い画風を示し、同じ工房での制作か絵師の共通性を想定できそうな関係にある。⑥（稿者注：白百合女子大本）は惜しいことに大半の絵が剥がされて失くなっているが、残っている絵（僧侶や災害場面など）を見ると共通性が強いことが分かる。⑨（稿者注：古典籍展観大入札会本）も何枚か絵が抜かれているらしい。これらの絵本と版本挿絵との関係や制作事情、原作本文の受容態度などはこれからの研究課題である。

と指摘されている。こうした奈良絵本の諸本の状況の中で、挿絵・本文ともに、典拠とした版本の系統まで特定でき

る國學院本は、極めて稀な例といえる。[12] 加えて、典拠とした版本が多くの奈良絵本に影響を与えたとされる明暦版ではなく、寛文版・天和版系統である点も注目に値する。今のところ寛文版・天和版系統の版本の影響下にある奈良絵本は見つかっていない。こうした点から、國學院本は奈良絵本『平家物語』の制作事情や制作過程の一端を示す貴重な伝本であるといえるだろう。

注

（1）現存する奈良絵本『平家物語』のほとんどが列帖装である。また、國學院本と神奈川県立歴史博物館本、真田宝物館本は表紙寸法もほぼ同じである。

（2）『平家物語大事典』「楠美家」項（薦田治子氏執筆　東京書籍　平成22年）参照。

（3）『平家物語大事典』「絵画」項（出口久徳氏執筆　東京書籍　平成22年）を基に作成した。

（4・5）出口久徳氏「寛文期の『平家物語』―寛文十二年版『平家物語』の挿絵をめぐって―」（『日本文学』51―10　平成14年10月）

（6）本文の引用は、寛文版を底本とする、佐藤謙三校注『角川文庫　平家物語』（角川書店　昭和34年）による。

（7）ただし、國學院本の巻七～九は章段番号を欠いている。この巻七～九は他巻と筆跡が異なっており、筆跡の違いと章段番号の欠落には少なからず関係があると思われる。なお、目録丁の章段番号は延宝五年版系統や元禄十一年版にも確認できる。

（8）國學院本の空白箇所にすべて挿絵があったとしても、寛文版の挿絵の数とは一致しない。

（9）十二点のうち、プリンストン大学ゲスト文庫蔵本、チェスタービーティライブラリー蔵本、洛東遺芳館蔵本、白百合女子大学図書館蔵本、姫路酒井家伝来本は未見。

（10）『平家物語大事典』「絵画」項（出口久徳氏執筆　東京書籍　平成22年）参照。

（11）松尾葦江氏「平家物語と絵画資料研究―國學院大學所蔵資料を中心に―」（『校史・学術資産研究』4　平成24年3月）

（12）永青文庫本の本文は、語り本系諸本の一つである、葉子十行本を基にしている。挿絵は、他の奈良絵本や版本と著しく画風が異なっている。

《使用画像一覧》

・明暦二年版…國學院大學日本文学資料室本〔九一三・四五／H五一〕
・寛文二年版…國學院大學日本文学資料室本〔九一三・四五六／一～一二〕
・寛永三年版…國學院大學図書館蔵〔貴一二八五～一二九六〕
本学図書館デジタルライブラリーで全巻の画像を公開している。

《参考画像一覧》

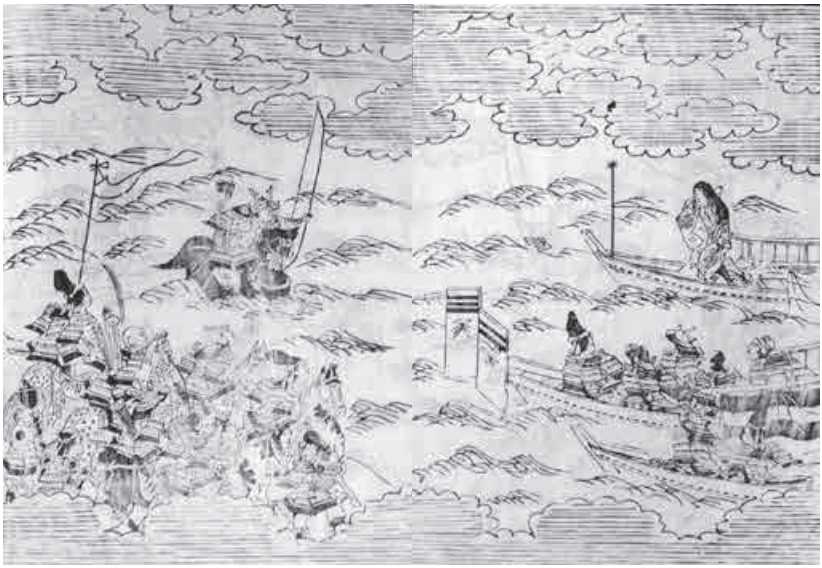
寛文版②

國學院本①

明暦版③

寛文版⑤

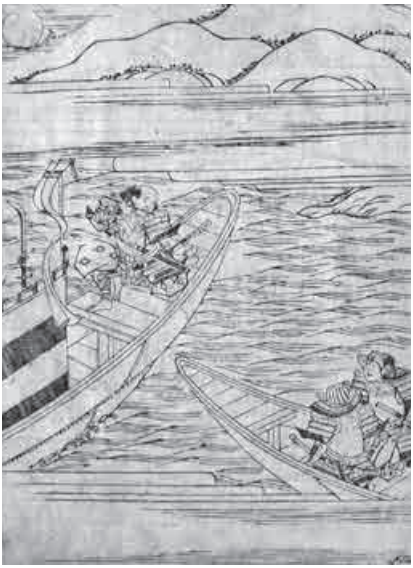
國學院本④



明暦版⑥

寛文版⑧

國學院本⑦



寛文版⑩

國學院本⑨

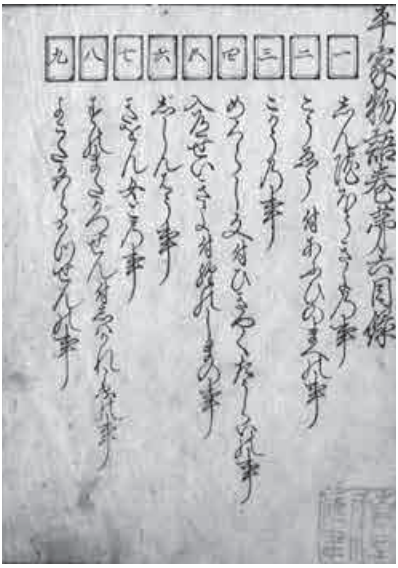
寛文版⑫

國學院本⑪

寛文版⑭

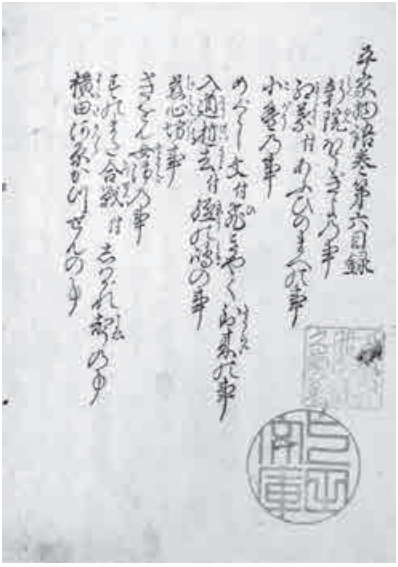
國學院本⑬

《本文比較画像一覧》

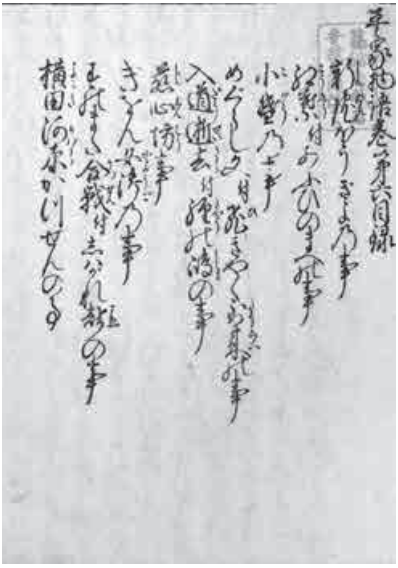


寛文十二年版

國學院本



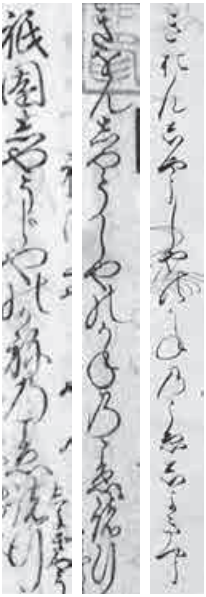
寛永三年版



明暦二年版

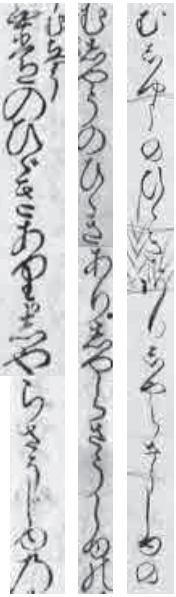
國　寛　明

きおんしやうしやのかねのこゑ　しよきやう



國　寛　明

むしやうのひゝきあ　りしやら　さうしゆの



國　寛　明

はな　のいろ　しやうしや　ひつすい　のことハり

國　寛　明

をあらハすおこれる　もの久　し　からす

國　寛　明

たゝ　はる　のよ　ゆめ　のことし

(※)画像は右から、國學院本、寛文十二年版、明暦二年版。

《挿絵場面一覧》

巻	番号	章段	内容
巻一	①	殿上の闇討の事	忠盛、鞘巻を差して参内する。
	②	殿上の闇討の事	家貞、殿上の小庭に控える。
	③	妓王の事	仏、妓王の庵に参上する。
	④	殿下の乗合の事	藤原基房、牛車で御出する。
	⑤	烽火の事（巻二）	重盛、自邸に軍兵を集める。
	⑥	殿下の乗合の事	資盛一行、鷹狩の帰り。
	⑦	大臣殿誅罰の事（巻十一）	宗盛、本性房湛豪と対面する。
巻二	①	西光が斬られの事	成親、清盛邸に連行される。
	②	西光が斬られの事	西光、清盛を面罵する。
	③	卒塔婆流しの事	康頼と成経。
	④	阿古屋の松の事	実方、老翁に松の場所を尋ねる。
巻三	①	頼豪の事	頼豪、白河天皇と対面する。
	②	有王が島下りの事	有王、俊寛と再会する。
	③	医師問答の事	重盛、熊野を参詣する。
	④	法印問答の事	安倍泰親、地震を占う。
巻四	①	厳島御幸の事	高倉院、厳島に御幸する。
	②	厳島御幸の事	高倉院、後白河法皇と対面する。
	③	高倉の宮園城寺へ入御の事	以仁王、女装して川を渡る。
	④	競が事	競、館に火をかける。
巻五	①	月見の事	徳大寺実定、大宮邸を尋ねる。
	②	物怪の事	馬の尾に鼠が巣を作る。
	③	勧進帳の事	文覚、勧進帳を読み上げる。
	④	五節の沙汰の事	福原新内裏の様子。
巻六	①	紅葉の事	高倉天皇、落葉を燃やした下役人を咎めず。

	②	紅葉の事
	③	小督の事
巻七	①	竹生島詣での事
	②	木曽の願書の事
	③	忠度都落の事
	④	経正の都落の事
巻八	①	山門御幸の事
	②	名虎の事
	③	太宰府落ちの事
	④	征夷将軍の院宣の事
巻九	①	木曽の最期の事
	②	木曽の最期の事
	③	二度の駆けの事
	④	敦盛最期の事
巻十	①	内裏女房の事
	②	海道下りの事
	③	千手の前の事
	④	横笛の事
巻十一	①	那須与一の事
	②	嗣信最期の事
	③	大臣殿誅罰の事
巻十二	①	重衡の斬られの事
	②	紺掻の沙汰の事
	③	土佐坊斬られの事
	④	六代の事

高倉天皇、女の童に衣を与える。	
仲国、小督のもとを尋ねる。	
経正、竹生島を指さす。	
大夫坊覚明、願書を読む。	
忠度、俊成邸の門をたたく。	
経正、仁和寺御室に青山の琵琶を返す。	
義仲・行家、後白河法皇と対面する。	
名虎・善男の相撲節。	
清経の入水。	
頼朝、院宣を受け取る。	
巴、御田師重の首をねじ切る。	
義仲の最期。	
梶原景時、大童姿の景季のもとへ駆け寄る。	
敦盛と直実。	
重衡、内裏女房と対面する。	
重衡、関東へ下向する。	
重衡と千手前と狩野介宗茂。	
横笛、滝口入道を訪ねる。	
与一、扇を射る。	
嗣信、教経に射られる。	
宗盛と頼朝と比企能員。	
重衡、大納言佐と対面する。	
頼朝、文覚から義朝の首を受け取る。	
昌俊、起請文を書く。	
六代、熊野を参詣する。	

※全49図。すべて半葉。